

私たちの通学路

高梁小学校 六年

うちだ まな
内田 真菜

私の通学路は、自宅を出発して、坂を上り畑の間を歩いて坂を下って、学校に着くという経路になっている。畑の間の細い道は、車はあまり通らないが、夏になると草が生いしげって、私たちの通学のじゃまをする。

六月のある休みの日の朝、母が、
「二人とも、通学路の草刈りをするから手伝って。」

と言ってきた。私は、「ええ。」と言うのは何とか我慢したが、虫がいるし、めんどくさいと思って返事をするのをためらっていた。姉も返事をしなかった。きっと私と同じで行きたくなかったのだろう。母は、続けて、

「あんたたちの通学路でしょ。」

とゆっくり庄をかけるように言った。私たちはしぶしぶ「はあい。」と気のない返事をして手伝うことにした。

「先に刈っとくから、呼んだら来て。」

と母は、草刈り機をかついで畑に向かった。返事をしたけれど、できれば行きたくなかった。やっぱり行くのはいやだった。三十分くらいだった時、ついに呼ばれた。「もう行かなきゃいけないのか。」と思いながら重い足取りで向かった。畑に着くと母が真っ赤な顔で草を刈っていた。通学路には刈られた草が歩く道をふさぐように倒れていた。それは二十メートルほど続いていた。刈られた草を集めることが私たちの仕事だ。私たちは、こんなに長い道のりをやるのかと、全くやる気が出なかった。しかし、真っ赤な顔の母を見ると手伝う以外の選択肢はなかった。姉と二人でほうきと熊手を交代しながら草を集めた。暑かった。帰りがかった。早く終わりたいかった。

二人で手伝っていると調子に乗ってきた。二人で話しながらしていると楽しくなってきた。通学路はきれいになっていった。畑の下のおじさんが、

「お手伝いがんばってるのお。」

と言ってくださった。おじさんは登下校の時いつも元気にあいさつをしてくれるおじさんだ。その言葉を聞いてますますがんばった。

先を見ると道に倒れている草はあと少しになっていた。私たちの顔も赤くなっていた。最後の力を振りしぼって、「何とか全ての倒れていた草を掃除することができた。

「ふう、なんとか終わった。」

母は変わらず真っ赤な顔だったが、

「おつかれさん。」

と笑顔で言ってくれた。

次の月曜日、通学路を通ると気分がよかった。虫などがでなくなって通りやすくなった。今までは、父が一人でやってくれていたけれど、姉と手伝ってきれいにした。おじさんへのあいさつの声も自然と大きくなった。

いやいや始めた手伝いだったが続けると自然にやる気が出てきた。そして、家族で力を合わせて草刈りをする事で、胸を張って、『私たちの通学路』と言えるようになった。